

女強盜

菊池寛

青空文庫

隆房大納言たかふさだいなごんが、檢非違使けいびいし（警視庁と裁判所をかねたもの）の別当（長官）であつた時の話である。白川のある家に、強盜ごうとうが入つた。その家の家人けにんに、一人の勇壯ゆうそうな若者がいて、身支度をして飛出したが暗くてどちらが味方か敵かわからない。まごまごしているうちに、気がついて見ると、味方はことごとく敗走して、自分一人が強盜の中にいる。しかも、強盜達は、自分を仲間の一人だと思つて話しかけたりしている。今更いまさら、戦つて見たところで、とりこめられてたちまちやられそうである。そこで、覚悟かくごをきめて、強盜の仲間のような顔をして、強盜について行き、盗品をわけるところへ行つて、強盜の顔を見定め住家もつきとめてやろうと云う氣になつた。それで、盗品の櫃ひつのなるべく軽いものを一つ背負つて、強盜について行つた。すると、朱雀門すざくもんの傍そばまで行くと、そこで盗品をわけ合つて、この男にも麻袋あさぶくろ一枚呉れた。その強盜の首領株と云うのは中肉中背の優美な男で年は二十四、五らしい。胴腹卷どうはらまきをして、左右の手にはこてをして長刀を持つてゐる。直衣袴のうしばかまの裾すそを緋ひの糸で、くくつたのをはいている。この男が、いろいろ指図さしずをして

いるが、他はまるで従者のように、素直に云うことをきいている。分配が終ると、皆みなそれぞれの方角に歩き出した。男は、この首領の後をつけてやろうと思ひ、十五、六間も後から、気取られないように、そつと尾行びこうした。すると、朱雀を南の方へと、四条通まで行つた。四条通を東へ行つたが、そこまではハッキリ姿が見えたが四条大宮の大理（検非違使別当のことである）の家の西の門のところ、ふと姿が見えなくなつた。つまり強盜のあとをつけていくと警視総監そうかんの官舎の裏門の所でふと見えなくなつたわけである。

二

男は、なおもそのあたりをかけめぐつて探したが、相手のかけはどこにもない。強盜の張本が、検非違使の官邸かんでいの中へ姿をかくすなど、奇怪至極きつがいしごくであると思つたが、深夜であるし、処置の方法がない。それで、仕方なく引き上げたが、あくる朝起き出ると、すぐに四条大宮へ行つて官邸の西の門あたりを調べて見た。すると、堀へいにかすかではあるが、血の痕あとがついている。昨夜の男が官邸にはいつたに違ひないと思つて、家へ帰ると主人に詳しく報告した。すると、主人は検非違使の長官とは割合懇意こんいであつたので、すぐ出向い

てその事を長官に話した。長官は驚いて家の中を搜索した。すると、例の血痕が北の
 対（離れ座敷）の車宿（車を入れておく建物）にこぼれているのが分った。北の対と云え
 ば、官邸に使われている女中達の宿である。きくと、女中の誰かが強盗をかくしているに
 相違ないと云うので、女中を一々呼び出した。すると、その中に大納言殿と云われる上席
 の女中がいたが、それが風邪気味だと云つて、出て来ない。それを、たとい人に負われて
 もよいから出て来いと云つたので、仕方なく出て来た。呼び出しておいてから、その局を
 さがして見ると、血のついた小袖が出て来た。怪しいと云うので、床板をめくつて見る
 とさまざまの物をかくしてあつた。訴人の男の云う通り緋の緒でくつた袴も、長刀も出
 て来た。その外に、一つの古い仮面が出て来た。その仮面をかぶつて男装して、指揮し
 ていたらしい。党類を責めとうたがどんなに、責められても白状しなかつた。長官は、自
 分が使つていた女中が強盗を働いていたのを謝罪する意味もあつたのであろう。白昼に、
 牢獄へ護送した。たいへんな見物であつた。その頃の女はきぬかずきと云う面被を
 つける例であつたが、それをぬがせて、諸人に顔を見せた。二十七、八ばかりのほそやか
 な身体つき、髪なども美しいよい女であつた。

三

これも女強盜の話である。時代は分らない。ある失業した侍さむらい（貴族に仕える男、後世の侍ではない）が、あった。年は、三十ばかりで、背丈も高く、少し赤ひげであるが立派な男であった。ある日の夕暮ゆうぐれ、京の町を歩いてみると、ある家の半はじとみ（小窓）から鼠ね鳴なきをして（浅草の六区や玉の井の女が鼠鳴きして客をよんだが、これは古代からのならわしである）手を指し出してその男をよんだ。男は近づいて（何か御用ですか）と云うと、（ちよつと話したいのです。その戸は閉まっているようですが、押おせば開きます。どうぞ開けておはいり下さい）と、云った。男は、思いがけない事だと思つたが、とにかくはいと、女が迎むかえて（その戸を閉めてから、お上り下さい）と、云つたので上つた。上ると、みすの中に引き入れた。昔は、一間の中にみすを垂れて、その中が女の居間であり、閨けいぼ房ぼうであつた。さし向いになつて見ると、年は二十ばかりで、愛あい嬌きやうがあり美しい女である。この位美しい女に、誘ゆう惑わくされた以上、男として手を拱つくねていることはないと思つたので、一いっ緒しょに寝ねた。割合い広い家なのに、家人は一人もない。どうした家だろうと、最初は怪あやしんだ、が、女と親しくなるにつれて、そんな事は気にならないで、日が暮れる

のも忘れて寝ていた。夜になると、門を叩く者がある。外に案内に出る者もないので、男が起き上って行つて門を開いた。すると、侍らしい男が二人と、女房らしい女が一人、下女を一人連れている。そして家にはいつて来ると、手分けをして、しとみ（雨戸のかわり）をおろしたり、台所へ行つて、火をもやしたりして、食事の用意を始め、やがて美しい銀器に食物を盛つて、主人の女にもこの男にも喰わせた。一体、この男がはいつた時に、門はちゃんと閉めてかんぬきもしておいたのである。主人の女は、外界との連絡がないはずであるのに、主人の食物のみか、この男の食物まで用意して持つて来ているのである。合点のゆかぬ事ばかりだが、お腹が空いているので、気にならないで、たらふく食べた。女も、男の手前など気にせず、思う存分たべている。食べおわると、女房らしい女が後片づけをして、皆連立つて去つた。すると、主人の女が、その男に門のかんぬきをさせてから、また二人いっしょに寝た。

四

その不思議な女と一夜をあかして、朝になるとまた門を叩く者がある。女は、男を開け

にやった。すると、男女が三、四人やつて来たが、昨夜の顔触とは全然違っている。そして、家の中へはいるとしとみを上げ掃除などをして、かゆと強飯とを主人の女とその男に給仕した。こんな風にして、二、三日暮っていた。男は、夢心地に女との愛欲生活をたのしんでいた。すると、女が何か外出する用事はないかと訊いたので、ちよつとあると答えると、しばらくして一頭の駿馬に、水干装束をした下人が二、三人付いてやつて来た。

すると女は、男をその家の納戸のような部屋へ案内した。外出用の衣裳が、いく通りも揃えてある。どれでも、気に入ったのを着ろという。男は、思いのままに装束して、その馬に乗り、下人を連れて外出した。その馬もいい馬だったが、下人達も後生大事と仕えてくれるのであった。帰ってくる、馬も下人も女主人に何ともいわれないのに、いつの間にか居なくなつた。このように、豊かに何の不自由もなく、二十日ばかり暮っていた。すると、女がある日、不思議な御縁でいっしよに暮しましたが、あなたもお気に召したから、こんな長くいらつしやるのでしよう。そうすれば、私のいうことは、生死にかかわらず聴いて下さるでしょうといった。男は、この生活にも相手の女にも心から魅せられていたから、もちろんです、生かそうとも殺そうともお心次第です、と答えた。すると、女

は大変よろこんで、男をいぎと言つて、奥の一間へ連れて行つた。そして、この男の髪へ縄をつけて、はたもの（罪人を答打つためにしぼりつける刑具である）に男を後向きにしぼりつけた。両足もしつかり、むすびつけた。そして、女は男のように烏帽子を被り水干袴をつけると答をもつてはだかにした男の背を八十ばかり打つた。そしてから、気持はどうですといつて訊いた。男は、何のこれしきのことと答えると女は満足して、いろいろといたわつた。よい食物などもたくさんたべさせた。三日ほどで、答のあとが、いえると、また同じ室につれて行つて、はたものにしぼりつけると、今度は、前よりもしたたかに八十打つた。血走り肉乱れるほど、はげしい打ち方だつた。

五

情なさけ容け赦ようしやもなく打ちつづけてから（我慢が出来ますか）と、いつて訊いた。男は、顔色も替かえず（出来ますとも）と、答えると、今度は前よりもほめ感じて、いろいろ介抱かいほうしてくれた。四、五日してから、また同じように打つてから、その次ぎには、背中ではなく、腹の方を打つた。

それにも辛抱しんぼうすると、女はいろいろいたわってくれたが、十日ばかりして、答のあとがすっかり回復したころ、ある夜、女は男に水干袴と立派な弓、やなぐい、すねあて、わらぐつなどを与えて、装束させてからいった。（これから蓼たてなか中の御門みかどに行つて、そつと弦打つるうち（弓のつるをならすことである）をして下さい。すると、誰かだれがそれに答えて弦打をするでしょう。そうしたら、口笛くちぶえを吹いて下さい。すると、またそれに答えて誰かが口笛を吹くでしょう。そして、人が寄つて来て「誰か」といつて訊くでしょうから、ただ「来ている」と、だけ返事をして下さい。そして相手の連中の行くところへいつしよに行つて下さい。そして、立つていろいろと立つていて人などが出て来て妨さまたげなどする場合はよく防いで下さい。仕事おわが了ると、舟岡山ふなおかやまの方へ引き上げて、そこで何か命令が出るでしょう。しかし、物を配分おわすることがあつても、あなたは取らないで下さい。）

女は、こまごまと注意を与えてから、男を出してやった。

男が蓼中の御門へ行つて見ると、自分と同じような姿をした者が二十人ばかりいた。それとは別に、首領らしい男が一人離れて立つていたが、色白く小柄こがらな男であるがこの男の前に皆畏かしこまっていた。外ほかに、手下らしい下人が二、三十人ばかりいた。そこでいろいろ命令を出してから、皆打揃つて京の町へ入つてある大きな家を襲おそつた。その前にその近所にあ

る目ぼしい援兵えんぺいでも出しそうな家に対して、二、三人ずつ人を分けて警戒けいかいさせた。その男も、その警戒の人数の中に加えられた。残りの人数は、みな目的の家に押し入った。その男が、警戒していた家からも、物音をききつけて、得物えものを持って四、五人走り出ようとしたのを、男はよく戦って射すくめてしまった。

六

その家の品物を盗みぬす了ると、一行は舟岡山へ引き取ってそこで品物を各自に分配してくれたが、その男は女に云われた通り、自分は見習いのためについて来たのだから、物はいらないと云って、辞退した。すると、首領らしい男はなるほど云うように、うなずいていた。

そこで、解散したが、男が家に帰って見ると、湯などわかしてあり、食物も用意してあって、歓待してくれた。こんな生活をしている内に、男はだんだん女がいとしく別れがたくなつて、自分が悪事を働いているとことさえ、気にならなくなつた。そして、五度十度と仕事に加わつた。刀を持って内へ押入おしいる組になつたり、弓を持って外で立番する組

にもなつた。どちらの組に加つても、相当な働きをした。すると、女がある日、一つのかぎをくれて、鳥丸からすまより東、六角より北のこういう所に行くと、蔵が五つある。その蔵の南から二番目のを、このかぎで開けなさい。いろいろ品物がいっているから、その中で気に入つたものを運んでいらつしやい。その近所には、かし車屋があるから、それを頼んだがよいと云つた。云われる通りの蔵を見つけて開けて見ると、ほしいと思うものが、充満ゆうまんしていた。それを運んで来て、平生使つていた。

こんなにして、一年以上過ぎた頃である。その女がある日、いつになく心細い顔をして涙ぐんでいる。どうしたかといつて訊くと、（あなたと本意なく別れるようになるかもしれない）と、云うのである。どうして、今そんな事を云うのかときくと（いや世の中と云うものはそうしたものである）と答えた。男は、ただ口先だけで云うことだとあまり気に止めていなかったが、それから数日して、例のように供人を連れ、馬に乗つて外出した。外出先で一泊して、あくる日帰ろうとすると、いつの間にか馬も供人も居なくなっている。驚き怪しんで家に帰つて見ると、その家は焼き払はらわれて、三人の女は影かげも形もない。六角の北の蔵の所へ行つて見たが、その家もすっかりとりこわされていた。男は初めて女のいったことが思い合わされた。その後、男は結局習い覚えた強盜を働いて世を送っている内、

捕えられて、この話を白状したのである。その男がつけ足していうには、あの小男の首領らしい男は結局自分が連れ添っていたあの女であつたらしい。同棲していた当時は、お互にその事には、一言もふれなかつたが、後で考え合わせると、そうらしいというのである。

青空文庫情報

底本：「悪いやつのお話へちくま文学の森⑧」筑摩書房

1988（昭和63）年8月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩現代文学大系 27 菊池寛・広津和郎集」筑摩書房

1977（昭和52）年10月

初出：「新大阪新聞」

1947（昭和22）年

入力：内田いつみ

校正：noriko saito

2009年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女強盗

菊池寛

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>